

第24話 南北朝の合一

わぼく ぎ ごかめやま かんこう さんしゅ じんぎ
 両朝和睦の議が成立して、後亀山天皇は京都に還幸され、三種の神器を
 ぼくちやう ごこまついん むろまちぼくふ
 北朝の後小松院にお伝えになる。室町幕府が始めて正当なものになる。

ちやうけい あまの あんぐう よしの うつ こうわ くらい
 これより先き、長慶天皇は文中2年8月、天野の行宮から吉野に遷られたが、弘和3年、在位16年で位
 よしなり ゆづ ごかめやま
 を御弟の熙成親王に譲られた。これを第99代後亀山天皇と申し上げる。

よしのちやうてい こりつ 吉野朝廷の孤立

すで の おとろ おとろ わづ
 この時には、既にたびたび述べたように、東国の官軍も衰え、九州の官軍も衰え、今また、近畿の僅か
 よしの こりつ すがた ごだいご もくてき せいけん かいふく
 に残っている官軍も衰えて、吉野の朝廷は全く孤立の姿となり、後醍醐天皇以来の目的であった政権の回復は、
 とて
 迎も望みがなくなったのです。

せいとう げん せんざい いせい つよ ぶりよく も あしかが
 しかし、正統の朝廷として儼として存在しているそのご威勢に対しては、さすがに強い武力を持った足利
 いかん ふへい いた たちま なんちやう くだ
 氏も、これを如何ともすることが出来なかったのみならず、幕府に不平を抱く者が出来ると、忽ち南朝に降っ
 かんぐん はんこう すで の ただよし ただふゆ
 て、すなわち官軍となって反抗して来る事は、既にたびたび述べたように、足利直義、直冬を始めて多くの武
 将の例でも明らかです。

ほくちやう いっとう
 足利氏は、北朝をこそほしいままにお立てしたが、これを奉じたのでは天下を一統する事が出来ないとい
 わ
 う事が足利氏にも分かって来たのです。

りやうちやう わぼく せいりつ 両朝和睦の成立

げんちやう あしかがよしみつ づか わぼく
 そこで元中9年(西暦1392年)10月、足利義満は使いを吉野の朝廷に送って、南北両朝の和睦をお願い
 みくらい いぜん だいかくじとう じみやういんとう つ
 した。天皇の御位には、以前のように、大覚寺統と持明院統の両統がかわるがわるお即きになるという事に
 さだ つ ま かえ さんしゅ じんぎ ごこまついん つた くだ ごこまつ
 定めて、それに就いては先づ京都にお還りの上、三種の神器を北朝の後小松院にお伝え下されば、後小松天皇
 ごかめやま じやうけん
 の皇太子には南朝の後亀山天皇の皇子をお立てするというのがその条件でした。

なんぼくりやうちやう わ とくべつ ふか あらす
 いうまでもない事ですが、南北両朝に分かれていても、皇室の間にはもとより特別に深いお争いがあ
 せいけん ほ いか もんだい
 ったわけではなくて、朝廷ではただ足利氏が政権を欲しいままにしているのをお怒りになっているので、問題は
 ほう ごかめやま ひさ てんか みだ せんそう ひとびと くる
 その方にあるのです。しかし、後亀山天皇は、すでに久しく天下が乱れて、戦争のために人々が苦しんでい
 あわ あま じしん よしみつ こ ゆる
 るのを哀れる余り、ご自身の事などはお考えにならずに、義満の請いを許された。

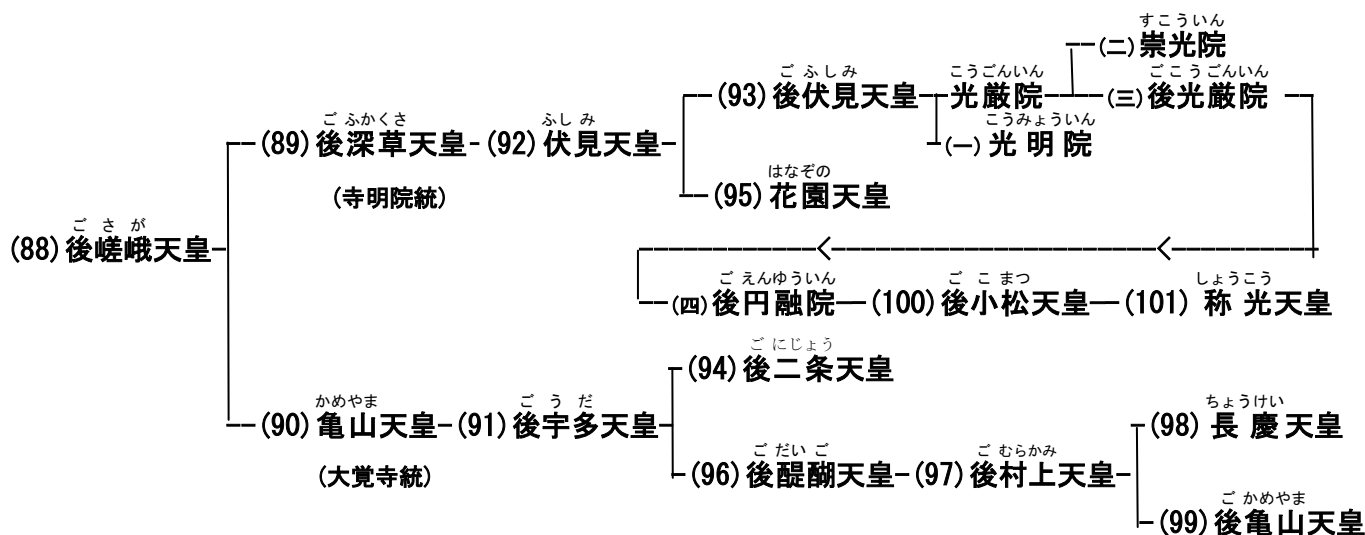
きやうとかんこう 京都還幸

げんちやう じんぎ ほう ぎやうこう ぎしき も うるう
 かくして、元中9年10月28日、天皇は神器を奉じて、行幸の儀式を以って吉野をご出発になり、閏10
 さが だいかくじ つちみかどどの じやうい ぎしき
 月2日の夜、京都にお着きになって嵯峨の大覚寺に入られた。そして、5日に、土御門殿での讓位のご儀式
 じんぎ ごこまついん つた
 で、神器を後小松院にお伝えになった。

お はじ ごこまついん ごこまつ よしみつ はじ せいとう せい
 ここに於いて始めて後小松院は第100代後小松天皇となられたのです。また、足利義満も始めて正当な征
 いたいしょうぐん みと むろまち ていない やくしよ ぼくふ
 夷大將軍と認められることになり、従って室町の邸内の役所も始めて正当な幕府ということが出来るように

第24話 南北朝の合一

なった。 実に後醍醐天皇が吉野に遷られてから57年目でした。 世にこれを南北朝の合一といいます。



条件の不履行

なお、これは後の事ですが、序にここに述べて置きたいのは、この時の条件でした両統の迭立が、実際には行われなかったという事です。

応永19年8月、後小松天皇は位を御子躬仁親王にお譲りになった。これを第101代称光天皇と申し上げる。この時、後亀山法皇一両朝合一の後、間もなく法皇となられた -- は、ご和睦の時の約束に違うのに怒られ、御子の小倉宮をお立てになろうとして、いろいろ抗議をなされたが、この時には既に義満は死んで、その子の義持が将軍となっていたので、義持は条件の事などを顧みようとしなかった。

足利氏の不誠意

南朝の舊臣で方々に遺っていた者達は、この乱暴な態度に大いに憤り、中には義兵を挙げて南朝の再興を図った者もいましたが、既に時代が遷り時勢が変わって、足利氏の勢力が全盛を極めていたのでいずれも失敗した。けれども、この運動は、その後も機会のある毎にしばしば企てられて、凡そ60年後の応仁の大乱の頃まで続いたのです。

実にこの一つの事だけを見ても、足利氏に誠意がなかった事がわかるではありませんか。 こういう不誠意な事をして勢力を得た足利氏の幕府が、果たしてよくいつまでも天下を無事に治めて行くことが出来るでしょうか。 それは巻を改めて述べる事にします。

(第24話 南北朝の合一 終わり。 次は前頁に戻り、 第25話 吉野時代の文化 へ)